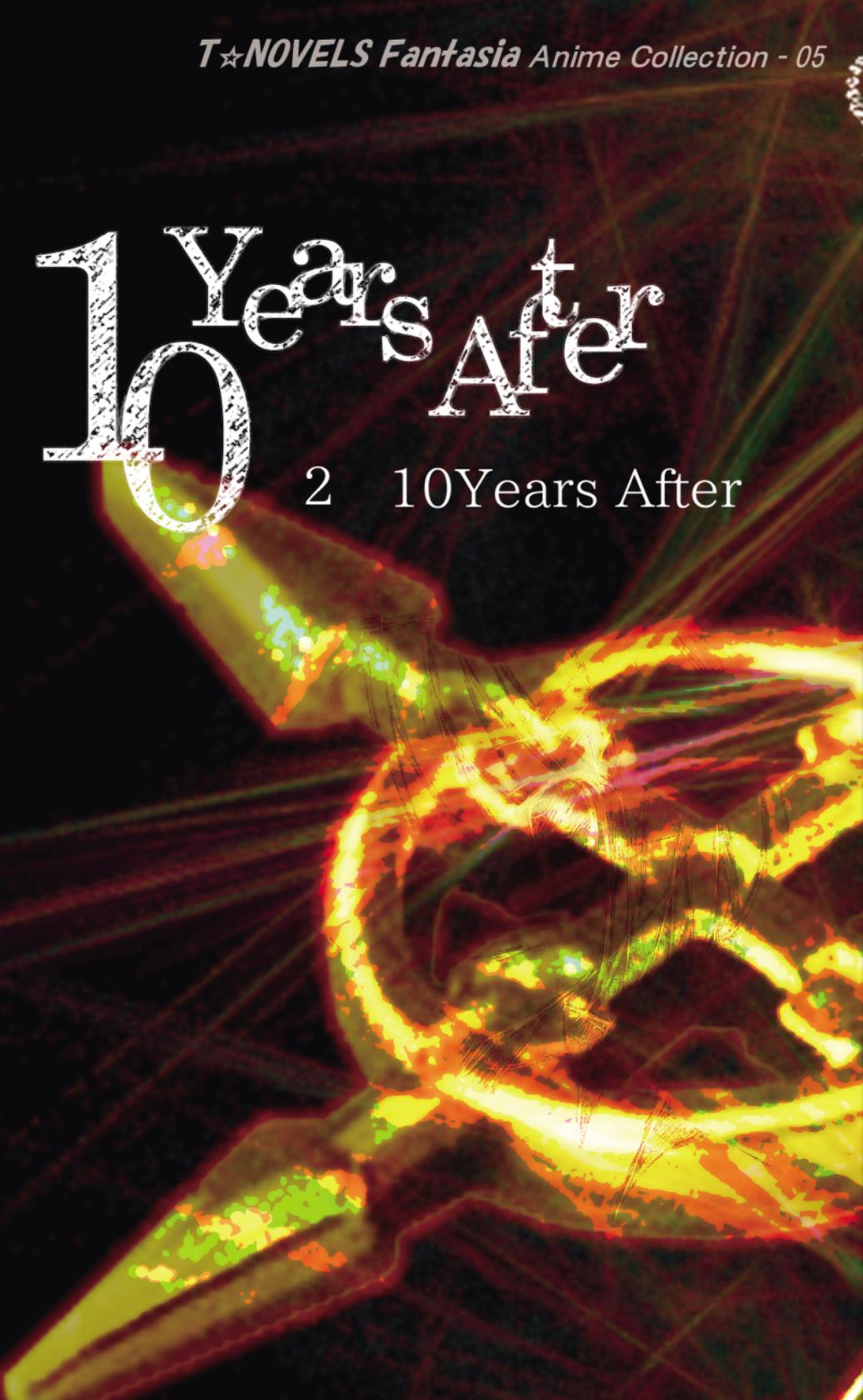


# 10 Years After

2 10Years After



しかし、一方で恭也には一つの疑問も生まれてくる。

提案者こそ巧妙に量されているもののこの数年で過剰な程に増強されつつある管理局の装備と人員、多発する強行事件、そしてこの突然の改組。これら全ては同一線上で起こっている出来事ではないのか、ひよつとしたらゲイズとスカリエッティは裏で糸を引いているのではないか……

無論、証拠は無いが一度生まれた疑惑はそう簡単に収まりはしない。

「調べて見る必要があるかもしれない……」

独りごちながら、しかしもし自分の疑惑が真実だった場合の危険性についても恭也は注意を払わねばならなかった。

誰に調査を担当させるにしろ、確実にそれは命がけのものとなるであろうし、相手が相手だけに市井のエージェントごときでは勤まる仕事でもない。

（これが、あっちの事ならば「樺」に任せる手もあるのだが……）

当面、恭也の悩みは尽きそうにもなかった。

一方、総本部長選では一敗地に塗れたゲイズだったが、

彼の意を酌んだ——少なくともそのように振舞った——スカリエッティの暗躍を上手く利用し、首都圏だけとは言え治安維持に関する全権をあの忌々しい成り上がりの小僧から引剥がす事が出来た事で幾らか溜飲は下がっていた。

「ふ、あの糞クソガキの悔しそうな表情が目には浮かぶわい」

新たに彼の物となつたばかりの真新しい治安本部長の椅子に座りながら、満足そうに言う、端末を操作して通信回線を開き、スカリエッティを呼びつける。

『これはこれは……ゲイズ閣下、此度の治安本部長就任、

謹んで心よりのお祝いを申し上げます』

「ふん、心にもない世辞など言わんでもよい。だが、まあいい。あのガジェット・ドローンとかいう玩具、貴様にしては上出来だ。なにしろ傲岸不遜な魔導士共がただの坊と化して為す術なく捻られるのだからな、まさに欣快」

『お気に召して頂き、光榮至極』

もし、この場の情景を恭也が見る事が叶うなら、間違ひなく戦慄と怒りを覚えずにはいられなかつたであろう光景

が展開される。

そして、同時に悟つた筈だ。全ての歯車が音立てて狂い始めたあの惑星CB—8での事件、その中心において彼を、当時の「アースラ」執務隊を窮地に陥れ、なのはの命を奪い掛けたものの正体を。

だが、残念ながらまだこの時、運命を司る神は恭也に真相を知らせる意思はなさそうであった。

彼が全てを知るには——まだ、幾許かの時間を必要としていた。

ともあれ、暫し心にもないお世辞を用いての腹の探り合いが続き、双方が互いの思惑から外れた行動を相手が取っていないことを認めて一先ずは満足を覚える。「さて、貴様の忠誠にはそれなりに報いてやらねばならんが……ここに、貴様が求めていた例の資料がある」そう言うと、端末のライブカメラに向けてデスクから取り出した書類綴りの束を掲げて見せるゲイズ。  
一瞬、画面の向こうでスカリエッティの冷酷無比な鉄仮面が若干崩れ、その反応を引き出した事に幾許かの喜びを得る。

「なにしろ一七年も昔の、それもあの小僧のホームグラウンドに探りを入れるのだからな、随分と手間を掛けさせられたぞ」

要するに、勿体をつけて「褒美」すら出来るだけ恩着せがましく高値で売りつけようという訳か——

表情には精々感謝の念を浮かべつつ、腹の奥底で「俗物が……」と嘲るスカリエッティ。

だが、奴の思惑がどうであれそれが彼の望む物である事は間違いないから、ここは精々忠犬を気取つてやるとしよう。

『閣下のお骨折り、感謝の言葉もございません』

「ならば、精々忠勤を心懸ける事だ。いつもの女に取りに来させる。三日後に時間を作つておく」

言い捨てて、スカリエッティの返答を待つ事なく端末のスイッチを切る。

平板になったスクリーンから視線を手にした書類に映し、ゲイズの表情が険しさを増す。

「促成クローニングによる術者の急速育成の成功事例。現在確認されている限り、その事例は二件のみであり、一件

は新暦六二年、時空物理学者で広域時空犯罪者でもあつたブレシア・テストロッサによるF計画、もう一件は新暦五五年——現地時間、西暦一九九八年頃に通称『海鳴』世界においてアメリカ合衆国防総省・国防高等計画研究局並びに日本国防衛庁・防衛技術研究所が主体となり複数の製薬会社、防衛産業が関与する形で実施されたLC計画。本書では、後者について現在入手可能な資料、並びに存命中の関係者への聞き取り調査を元にその詳細を報告するものである……」

口に出して読み上げる度、すっかり俗物化して権力の権化となり果ててはいるもののそれでも管理局パワーエリートとして当然の疑惑が浮かび上がってくる。

ゲイズが、スカリエッティを「飼ひ始め」て以来徹底的に揉み潰してきた黒い噂——身元の解らぬ孤児や僅かなカネの為に仲介業者に売られた乳児を扱う人身売買マーケットに、スカリエッティが関与しているという噂と、彼が求めていたこの報告書、そして現在彼が行なっている研究。

それらをひと繋がりで見に行けば、嫌でもあるたつた

一つの疑惑が浮かび上がってくるのだ。

（あの男は——戦争でも企んでいるのだろうか）

この時初めてレジアス・ゲイズは、自分がとてつもない怪物を抱え込んでしまったのではないかという思いに捕われたのだった。

八神はやてが恭也の下を訊ねたのは、首都治安維持本部設立の一報があつてすぐの事であつた。

「いきなりですまんのやけど、兄さん、時間ええやろか？」

インターホンを押すなりそう言うはやてに対し、恭也は僅かに目尻を緩めると、自分の席を立って戸口に向かおうとするグリフィスを片手で軽く制して、自らドアを開けに行く。

「お前達を締め出したつもりは、一度もないけどな」

「おおきに」

現在、はやては上級幹部養成過程を終えたばかりで無任所の待命状態の筈であるから、恐らくは暇を持て余して茶飲み話にでも来たのだろう、恭也は最初そう考えたがはやての背後になのは、フェイトの姿が合ったことと三人の表

情が暇潰しにしてはやや硬い事から、何か大事な話があるのだろうと気付き、柔和だった表情を少し引き締めながら三人を迎え入れた。

「何か、大事な話があるようだな」

「さすが兄さん、ようお解りですな」

「そりゃ、お前らの表情を見ればな」

応接セツトに三人を座らせ、卓上の防諜装置スクランブラーの作動を確認して自分もその向いに腰を下ろす。

その間に、グリフィスが人数分のコーヒーを入れ、一礼して出て行くこうとするのをはやてが呼び止めてグリフィスにも座るように促す。

「ですが……」と躊躇ちゆうちゆうの表情を浮かべつつ、直接の上司である恭也に如何すべきか目線で訊ねるグリフィス。

「どうやら、お前にも関係ある……というより、お前にも聞いて欲しい話のようだな。座りなさい」

「はい」

恭也にそう言われると、断る道理もない。取り敢えず、自分の分のコーヒーをカップに注いで下座に腰を

下ろす。

その間に、なのはがカップを取り上げて一口啜り、やや神妙な表情を浮かべながら舌先で転がすようにその味を確かめ、顔を上げる。

「グリフィス君、大分上達したね。でもまだ豆の量とお湯の温度に努力が必要かな？八五点」

「あ、あはは……相変わらず、厳しいですねなのはさん」  
教育畑の人間らしい、なのはの率直な物言いに僅かに苦笑を浮かべるグリフィス。

「はは……そりゃまあ、うちの三兄妹の中じや一番母さんの遺伝子を色濃く継いでるのがなのはだからな、味覚もそれなりに煩うるさくなつて当然だ」

少し落ち込んだ様子ようすのグリフィスを見て、恭也が軽くなのはを窘めるようににそう言うのと、軽い笑いの渦がその場を包み込んで緊張を解す。

「逆に、美由希姉さんは未だに翠屋の厨房出入り禁止、解けんようですな」

恭也の科白を受けて、ここぞとばかりになのはの姉、美由希の現状についてははやてが触れると今度は遠慮のない大

爆笑。

「ま、あいつにはこの方面の素質はゼロだ。しかしおかしな事もあるもんだな……あれだけ長い事母さんの技を観る機会があつて且つ美沙斗さんも大した腕前の筈なのに、あいつだけは殺人料理が毒料理になつた程度にしか進歩しないというのも」

はやての後を受けて再び切り替へす恭也の言も容赦ない。尤も、その頃遙か時空枝を幾つも跨いだ海鳴の実家で件の人物が盛大なくしゃみを連発したかどうかまでは誰も解らない。

「さてと……まあ、美由希の事は置いておくとして、要件を聞こうか」

そう言つて、恭也は表情をやおら真剣なものに改めると、はやての顔に鋭い視線を送つて来る。

その視線を受けて雑談の時間が終わった事を知つたはやても、表情を改め傍らに持参した茶封筒をテーブルに置くと、恭也の顔を見つめ返しながら用件を切り出した。「兄さんに時間を割いてもろうたんは、他でもあれへん……新しい部隊をな、一つ作りたいねん。兄さんに、そ

のための手続きと根回し、それに部隊の後ろ楯をお願いしたいねん」

そう言つて、はやてはテーブルに置いた茶封筒の封を開き、中に入つていた書類の束を取り出すと、クリップで束ねられたその一つを恭也に手渡し、見て欲しいと促した。書類を受け取つた恭也が十数枚のA4コピー紙からなるそれに目を通す間、じつと黙つて恭也の顔を凝視しつつ無言で待つはやて。

時計の秒針が時を刻む規則正しい無機質な響きと、書類を捲る僅かな紙ずれの音だけが静まり返つた執務室に小さく、響く、

やがて、目に険しい表情を浮かべ書類全てに目を通し終つた恭也は、それをテーブルの上に置くと無言のままで腕を組み、はやて、なのは、フェイトの顔を当分に睨みつけた。

「お前達が言わんとしてゐることは解る……確かに、この書類にもあるようにここ数年の対時空遺失物事案<sup>クレストロギア</sup>における初動の遅れ、それに伴う被害の拡大状況は如何ともしがたいものはある」

「せやったら……」

恭也の言葉に、一定の同意を得られたと確信したはやては、恭也に向けて身乗り出した。

「だが、だからと言ってこの提案は受け入れられんな……特に有能な少数の実力者のみを選りすぐった、管区の垣根を越えて行動する機動捜査専門のエリート部隊。はやて、お前は自分で何をやろうとしているのか理解してるのか？」

思わぬ、痛烈で容赦のない拒絶の言葉。思わず、身乗り出したままのはやてがその姿勢で硬直する。

「確かに、対時空遺失物事案における初動の遅れや管区、部局間の連携の不備は問題だ。だがな、はやて。根本的な手順をお前は間違ってるぞ」

それは、別に語気を荒げた訳でもなく一見いつもの恭也と何ら変わる所のない、淡々として落ち着いた語り口であった。

だが――

そうでありながら、そこに嘘偽りのない怒気が混じっている事を、その言葉を投げ掛けられたはやて本人

以上に隣でやり取りを聞いていたなのはこそ、より明確に感じ取った。

「はやてちゃん――」

僅かにソファから腰を浮かし、硬直したまま動かない友人の顔を、心配そうに覗き込むのは。そこには、信じられないと言う面持ちで返す言葉なくわなわなと震えるはやての姿があった。

「お兄ちゃん――」

そんなはやての様子に、思わず何かを言い掛けようとするのはだったが、しかしその行動は遠慮がちに上着の裾をひっぱるフェイトによつて中止された。

常に暴走しがちな友人二人――はやてとなのはに引きずり回されるが故に、何かと暴走時の静止役に回る多くのフェイトだが、そうであるが故に恭也が全ての言葉言い切った訳ではないと直感で悟り、注意を喚起したのであった。

そのフェイトの注意喚起によつて一瞬で冷静さを取り戻したなのは、浮かし掛けた腰を再びソファに落ち付けるのと、「ごめん」と目配せで友人に詫びと感謝の念を示すと、

じつと上司でもある兄の顔を見据えながら続く言葉を待った。

「確かに——」

はやてこそまだ硬直したままだが、なのはが落ち着きを取り戻した事を察した恭也がフェイトが予想した通り、一呼吸ほどの間を置いて再び口を開いた。

「確かに、フェイトの指摘した問題それ自体は検討の余地がある、というよりも早急に何らかの対策を考えねばならん事ではあるし、同時にはやてがこの上申書の裏に隠した真意も又解らんでもない。だがな」

敢えて厳しい事を言う時の癖で、瞬きする事なく一切の感情を押し殺した恐ろしく静謐な視線をはやての目に注ぐ。

「睨まれる」のとも「見つめられる」のとも異なるこの一種独特の視線を真正面から注ぎ込まれ、はやては視線を反らす事も顔を背ける事も出来ずにいた、が、同時に頭の芯がすつと冷静さを取り戻して行くのを自覚せずにはいられなかった。

「少数精鋭のエリート集団、と言うのは完全な劇薬なん

だ。ましてや、そこに部局や管区の頭上を越える形での捜査／警備業務の優越権が付与されるとなるとな、例えそれが立案者の思う所にあらざるとしても政治的な思惑が絡む単に厄介者となるだけならばまだいいさ、だけどな、お前の予想だにしない所で隊が政争の道具と化してしまった場合、何よりも隊員を本来の仕事とは全く関係のない所で地獄に叩き落とす事になるぞ」

一言、一言が囁んで含めるように落ち着いた、淡々とした調子で発せられているにも拘らず、一言を受け止める度にははやての顔色はどんどんと青醒めていく。

確かに、はやては非常に頭が回る。指揮官としての資質は経験と教育を過不足・偏り無く積み重ねるならば恐らく将来的には恭也を遙かに越えてリンドンイヤーティの領域にも届くだろう。だが、残念ながら今はまだ本格的な指揮幹部教育すら受けた事のない将来の「指揮官候補」に過ぎないはやてでは、経験者ならば容易に理解可能なそうしたりスクに思い至るのはどうやら難しかったらしい。

何か返す言葉を発しようと言うよりも脳が思考に必要な酸素を取り込もうとしているかのようにはくばくと無意味

に口を開け閉めしながら、蒼白な表情のまま硬直するはやてに、同情と憐憫の混じった表情を投げ掛け、言葉を送る事の出来ぬ友人の代わりにまだしもある程度の冷静さを持つて恭也の言葉を聞く事の出来たフェイトが「では、どのようにすればいいのですか？」と問うた。

「そうだな、と呟き、一瞬瞑目する恭也。対案それ自体は上申書を読んでいる間に頭の中で纏める事は出来ていたが、それを説明する為の文脈の組立に僅かな思考の時間が必要だったのだ。

「そうだな……一番肝腎な事はだ、新しく部隊を作るにしてもその部隊が本質的に無害であると周囲に認識させる事だ」

「無害……ですか」

恭也の口から出た意外な言葉に、思わずフェイトが確認を返す。

「ああ。一番肝腎な事はだ、その存在が政治的であると言う認識を周囲に持たれぬ事だ。その点のはやての原案では無配慮に過ぎる」

つまり、好むと好まざるとに問わず原案のままではリンデイ・ハラオウン―レティシア・ロウラン―月村恭也という、一部で「ハラオウン派」と呼ばれる一派の勢力強化の為の抱え込み策と勘繰る者が後を断たぬだろうと言う事である。

確かに、ハラオウン派と呼ばれ派閥と定義されても仕方がない程度には彼等の結束は固い。だが、それが局内における政治的駆け引きの為のものではなく、長年続いて来た因縁に決着を着ける為の物である事など、本人達以外には解らぬ事実でしかないのだ。

そして、ここにいる三人――はやて、フェイト、なのはも又「ハラオウン派」の中枢メンバーである事それ自体は間違いのない事実ではある、が、同時に彼女達はまだ子供――年齢的にはそろそろ少女と言う年代を卒業しつつあるとは言え、大人である恭也達から見れば未だ危うげな子供である。で、あるならば、彼女達にはそのような雑音から出来るだけ無縁な環境にあつて、純粹に自らの信じる社会正義の為に働くべきであつて政治的な迷惑の中で泳ぎ回るのはリンデイ・レティ・恭也の三人だけであるべきと恭也

は思っていたのである。

それに対し、漸く硬直から回復したはやては何か意を唱えたそうではあったが、咎めると言うよりも窘めるようなフェイトの視線を受けて黙り込んだ。

「では、先生ならばどのようにされますか？」

はやての様子から、再起動こそしたものの、話すのはまだ自分がした方がよさそうだと判断したフェイトが、はやてが何かを言い出す前にそう切り出した。

それに対し、恭也が口にしたのは概ね以下のような内容である。

まず、現在の警備総本部が抱える重要案件の中でも最も厄介で、然も対応の難しいのが数ヶ月前より頻発している「レリック」と呼ばれる時空遺失物に関わる事件である。

この「レリック」事件の厄介さは、過去に発生した他の時空遺失物事件が概ね限られた地域内のみで完結しているのに対しこちらは先ず第3管区、次いで第8、第2、第5、再び第2……と言うように、複数の時空警備本部の管轄地域で、ゲリラ的に発生しているのだ。

それは、従来の時空遺失物がその性格上単体、若しくは複数であっても単一地域に集中して存在する事が当り前であり今回のように法則性も何もなく複数の管区に分散して同種の事件が発生する、等と言うのが想像の埒外にあったが故の管区間連携体制の整備の不足を露呈させ、つまるところ殆どの事案において対応の遅れ——レリックの活性化とほぼ同時に発生する、「ガジェット・ドローン」と呼ばれる正体不明の小型無人兵器群による破壊活動による民間被害の拡大とガジェット・ドローンによるレリックの収奪という、二重の意味での管理局の権威失墜に直結しかねない事態を引き起こしていた。

それに対するに、確かに警備総本部直轄の機動警備専門チームを設置し、専従的に対応に充てると言うアイデア自体は理には叶っている。

ただし、その為には言え管区本部に優越する捜査権の付与や、ガジェット・ドローンが搭載する反魔導力場発生システムへの対抗措置としてのA+ランク以上の高位魔導士のみでの部隊編成等は些かにも内容が先鋭的に過ぎ、総本部直轄の専従担当部門設立には好意的な人間でも、その

内容には反感を感じずにはいられないだろう。

それを抑える為には、例えば部隊をエリート部隊ではなく、早目に経験を積ませてやった方が良さそうな執務学校在校生の有望株に事件の現場を肌で経験させる一種の実地教育部隊とするのがいいだろう。

その上で、対象をレリックに限定した上で「適当な即応可能な専従部隊が他に存在しない」事を理由に、警備総本部命令という形でレリックの回収・護送作業における権限を新部隊に付与する。

そうすれば、実体はともかくとして対外的には「上から」の指示という図式が成立し、もしも専従任務が新部隊には荷が勝ち過ぎると判明した所で責任はそれを命じた総本部に向けられる事になる。

そこまで聞いて、三人が三人とも「やられた！」という表情を浮かべざるを得なくなつた。

立案者であつたはやてにしろ、賛同者であるなのは、フェイトにしろ、自分達の事ならば既に十二分に視線が行き届くようにはなつていたが、そうであるが故に今度は幾許かの視野狭窄と過信——自分達の事は見

えても、周囲がどのように評価を与えるかまでは見え難くなつていた事に改めて気付かされ、その点についての配慮を巡らせ同時に、何があろうと若い彼女達には決して害が及ばぬよう、表立ってはともかく内実的には後见人である事の義務を果たしてみせた恭也に対し、まだまだ自分達が及ぶべくもない事を再認識させられた。

結果、警備総本部直轄組織としての重要時空遺失物案件専従の機動警備部隊設立は将来の検討課題として、それを視野に入れた試験的な教育部隊の設立ならば認める、ついで二週間以内に必要とされる装備・予算・人員等々を検討し書類として提出するようという総本部長の署名入りの命令書を手に、三人は恭也のオフィスを後にしたのであつた。

「ふむ、これは困つたな……」

恭也が命じた二週間の期限を二日程残して、オフィスに届けられた要望書の文面を眺めながら、だが言葉とは裏腹に面白そうな、だがどこことなく意地悪げな笑みを口元に浮かべつつ、恭也は半眼を傍らのデスクで書類の決済に勤し

むグリフィスに向けた。

「何が、でしょう？」

恭也のその視線に気付いたのか、グリフィスも又書類綴りを捲る手を止めて顔を上げる。

「はやてから届いた要望書だがな、出来るだけ有能な事務方の副官を一人、具体的にはお前を寄越せと言つて来ている。あいつ、この前俺にやり込められた意趣返しでもする気なのかな？」

「まさか……とは言い切れませぬね。彼女、時たま物凄く腹黒い事を涼しい顔でしますから」

恭也にしては珍しい、砕けた調子に思わずグリフィスも苦笑を浮かべる。

まったくだ……と、冗談とも本気とも取り難いグリフィスの苦笑交じりのその一言に答えながら、視線は再び書類に記載された文字の上をなぞつていく。

恭也に諭されて作り上げた修正案、と言う割には実際には最初から狙いはこつちだったんじゃないか？と疑いたくなる程卒のない書類に先程とは又異なる種類の苦笑を思わず口の端に載せつつ、これならば特に問題は無か

ろうと気心の知れた補佐官を手放す事も含めて承認のサインを入れ、決済済の書類綴りに放り込む。

ほんの一瞬だけ、まだまだ手間の掛かる子供だと思つていた妹や弟子達が少しだけ自立した大人になったような気がして、僅かな寂しさといやいや、それでも結局俺の後ろ楯を必要とする間はまだまだだ、という思いとが交錯し、しかし、それも本当に一瞬の事で次の瞬間には勤勉で実直な若き警備総本部長の表情を取り戻して恭也は彼を待つ仕事に戻るのだった。

本部長の決済を得たからと言つて、その日その瞬間から新しい部隊が回り始める訳ではない。

事前にあちこちへの根回しは進めていたとは言つても、オフィスを確保し、必要な備品を発注し、引き抜いてくる人員の所属する部局に挨拶回りし、と管理局も又お役所である以上、部隊の長となる人物にはやらねばならない雑事が山のように待ち構えているのは世の常である。

それを、持前の若さと能天気さと腹黒さで乗り越え——と言うよりも薙ぎ倒しながら、出来上がって来たばかりの

真新しい表札にはやては我知らず表情が緩み切るのを抑える事が出来なかつた。

「うんうん、ええ出来やええ出来や。とうとうこれでもうちも一国一城の主やで………つて、まあ期限付きの実験部隊なんやけどな」

「それでも課長は課長ですよ〜ああ、真新しいデスク、堪らないですよ〜」

隊で面倒を見る事になっている新人を迎えに行つたのはとフェイトが帰つてきて、全員が揃つた所で初めてお披露目する事になつている為まだ包装紙に包まれたままの新しい部隊表札をこれまた真新しいデスクの上に載せて落ち付きなくそわそわしているはやての隣で、一見するとドールハウスの部品を思わせるミニサイズのデスクの天板に頬擦りして傷一つ無い新品のその感触を堪能している、身長四〇センチ程の人影

「嘗て、「闇の書」事件の悲しい経緯を経て一旦は完全に破壊された「夜天の魔導書」の管制人格を再構築し、更に「愚連艦隊」事件を皮切りとして幾度かの経

験を経て完成した、八神はやての「相方」であり「夜天の魔導書」の容量増大に伴つて分割・再構成された「蒼天の魔導書」の管制人格である、彼女の名をリインフォースII という。

最近では「腹黒」「陰謀マニア」等というあまり有り難くない異名を頂戴する機会も多い「母親」のはやてとは好対照にその性格は裏表のない天真爛漫、あの「親」からよくもまあこんな素直な人格が育つたもんだ、と悪気は無くともそれなりに失礼な評価を周囲から奉られるのが最近のはやてには悩みの種となつていた（なにしろ、当のはやて本人もそれを事実と認めざるをえず、表立つて文句を言える立場でもないので結構辛かつたりする。まあ、そういうのを世間一般では自業自得と言うのだが）。

とー

「お待ちどおさま」

音もなくスライド式のドアが開き、はやてとリインフォースIIの二人だけだったオフィスに入ってくる人影二つ。

「新部隊のメンバー全員、ロビーに集合してるよ」

「さよか。ほな、ぼつぼついいこか」

オフィスの顔を見せた二つの人影の片方——サイドテーブルに結った栗色の髪の女性がそう言うと、大きく首肯してデスクから立ち上がる。

口調だけは努めて平静を装っているつもりでも、その実デスクから立ち上がる際の一举手一投足から新部隊のお披露目を早くやりたくてうずうずしていたであろう事が容易に読み取れ、一緒にいた金髪の女性と顔を見合わせ軽く苦笑を浮かべる栗色の髪の女性。

その傍らを急ぎ足で過る寸前、ふとはやては足を止め二人の方を振り向いた。

「多分、学校出て以来の久方振りのせいもあるんやろけど、その制服もよう似合とんで、なのはちゃん、フェイトちゃん」

急いでいるように見えて、見る所はきちんと見ている親友にして上官の科白に、その言葉を掛けられた二人——休暇が重なる時は極力顔を合わせるようにしていたとは言え、片や航空本部教育航空隊付、片や捜査本部付で所属が異なっていたが故に教育期間終了後は三人揃って同じ制服を着る機会には恵まれてこなかったなのはとフ

エイトの表情にも笑みが浮かぶ。

その様子に、はやての肩に飛び乗り、自分はどうだと自己主張するリインフォースIIに、勿論よく似合つてると返すのはとフェイト。

一頻り、明るい笑いがまだそこいら中に未開封の梱包や取り敢えず運び込まれた——と言うより放り込まれただけのデスクが散らばるオフィスに響き、さて、あんまり皆を待たせちゃ悪いよ、とフェイトに諭されて笑みを収めた四人は、文字通りの新たな一步に向けて歩を進めて行つたのだ。

新部隊の発足から暫くの時間が過ぎた。

「いろいろあるようですが、一先ずは順調に回つてるようですよ」

そう言つて、機動六課から届けられた最初の月例報告書を手にも、珍しく上機嫌に頬を緩ませていた恭也の前に、香り高い芳香を放つコーヒーのカップが差し出された。

「……の、ようだな。少々初出勤では無茶をやつたようだが今のところは順調に滑り出しているようだ」

恭也はそう言つて報告書をデスクに置くと、カップを手に取り僅かに方向を楽しんでから一口含んで、舌先で転がす。

「……事この点に関してはグリフィスを放り出したのは正解だったな。九〇点」

その言葉に、機動六課へ転出したグリフィスに替わつて新たに補佐官に任命されたヒューズ執務官補が手に持った朱塗りのお盆の下で軽く握り拳を作つて「やった!」と小さなガッツポーズを浮かべた。

ヒューズはかつて恭也が民間協力者の立場のまま「アースラ」執務科長代理を務めていた時代に武裝分隊の副官を務めていた人物で、「アースラ」執務科のメンバーが総入れ替えになつてからはそれぞれ異なる職場に移動となつていた為、実に六年ぶりに恭也の下に着く事になつたのである。

年齢は恭也よりも丁度四歳の年下、二八歳の才媛であり、「アースラ」時代は当時のエイミィ・リミエツタ航海士と共に年若いと言うよりも若過ぎる魔導分隊の善き姉的存在でもあつた。

そのせいか、六課のメンバーともはやて達を間に挟んでかなり早い時期に友好関係を築いたらしく、時たまはやてやなのはから電話を貰つては昼食を共にしたりする事も多いようだ。

と、そのヒューズ、お盆を脇に置いて携帯端末を取り出し、液晶画面に触れながら恭也の方を向く。

「その六課ですが……」

「ん?」

携帯端末に届けられたメールを恭也のデスクの端末に転送しながら確認と言うよりも相談と言つた感じでヒューズは言葉が続ける。

「ふむ、隊員のお披露目を兼ねた昼食会の招待と、ついでにフェイトが可愛がつてる弟子に稽古を付けてくれ、か……俺は一向に構わんが、スケジュールの都合は付くか?」

実際のところは、スケジュールの都合が付くかどうかよりも付けてくれと言いたい恭也だったが、流石に公私混同は拙い。

そうでなくとも六課は予想通り好むと好まざるとに関らずハラオウン内務次官―月村総本部長派の実動集団、とい

う認識も部内には既に生まれかかっており、身内だからと余り表立った依怙<sup>いご</sup>鼻<sup>いび</sup>屑<sup>せつ</sup>をする事も出来なかった。

「そうですね……」

そのあたりの事情は、ヒューズも着任前にはやて達と一緒に行ったデイナアの席で一通り聞かされていたから十二分に承知している。素早く自分のデスクに戻り、端末にスケジューラを表示するとびっしりと予定で埋め尽くされたそれを上下に行きつ戻りつスクロールさせながら、何とか纏まった時間の取れそうな日を探し出した。

「えと、五日後なら。ただし、この日は午前中、超弦回廊の安善航行における規約の見直しに関する公開意見会があり、その後船舶協会との会食が入っています。その後の予定は空いてますから、こちらから連絡して夕食会に変更する形であれば、という条件付きになりますが」

その言葉に、恭也は若干考え込んだが、同時にフェイトから弟子の稽古を頼まれている事を考えれば、先に稽古を付けてからのんびりと食事に行っても良さそうではあった。

では、それとヒューズに告げ、ついでに未成年者が

殆どの六課のメンバーを連れていつて浮かさないで済む程度で、どこかいい店はあったかなと思案を巡らせた。

子供の頃から超一級の料理人の義母の料理で育てられた為、当人に自覚はなくとも高町家の三兄妹は何れも玄人はだしの食通で通る舌の持ち主である。その為、恭也の事を余り快く思わない幹部でも、恭也が主宰する食事会には高い評価を与えているのが常だった。

ともあれ、恭也が選んだのは官公庁・オフィス街と繁華街の丁度間くらいにあるチャイニーズ・レストランで、日中や平日はお偉いさんや企業重役が会食や接待に、休日は学生のコンパにと利用されることが多い為程々の調度と料理と飲み物を比較的リーズナブルな価格で提供している他、会食コースではテーブルオーダーの食べ放題が設定されているのがポイントだった。

ついでに、こちらの都合で予定を変えさせた詫びに払いは自分持ちにしておく事を書き添えてメールを送ると、殆ど間を置く事なく今度は恭也の携帯に直接はやてからメールが届き、「さすが兄さん、太っ腹！」と関西人らしい率直さのそのメールに恭也は思わず頬を綻ばせた。

そして当日。

予定よりも若干意見会が長引いたものの、日中の予定を終えてオフィスに戻り、手早く着替えを済ませて公用車ではなく、ヒューズの自家用車に乗り込む。その足取りが我知らぬうちに軽やかになっていたのは、まあ止むを得まい。

「さて、今日はこれくらいにしとこうか」

「はい！」

グラウンドに整列した候補生に向けてなのはがそう言うのと、居並ぶ候補生が一齐に歓喜の声を上げた。

初出勤で確認された問題点の解決その他で、ここ数日は相当に絞られた為、幾ら若いとは言えかなり堪えていたのは事実だった。

「で、今日はこの後だけど……」

何時もより早めの訓練終了で、少し浮つき始めた候補生達に向け、なのは再び声を掛ける。

「お兄ちゃん……じゃなかった、私の兄が夕食をご馳走してくれる事になって、一八〇〇に集合だから、

みんなそれまでにシャワー浴びて汗を落して着替えておく事。集合は一七五五にロビーで」

その言葉に、思わずおおつ！とかやった、タダ飯！とか言う声が上がった。と、めいめいに好き勝手な事を言い合う候補生の中から質問の手が上がる。

「えっと、失礼ですけど、なのはさんのお兄さんって？」

質問をぶつけたのは、なのはの直弟子の一人でありなのはが率いるスターズ分隊の一員でもある、スバル・ナカジマ候補生だった。

「確か、総本部勤務だったのは聞いた事があるんですけど……」

スバルの問いに、傍らにいた寮のルームメイトで同じくなのはの直弟子兼スターズ分隊員の、ティアナ・ランスタール候補生が小耳に挟んだ事のある情報を付け足した。

「うん、そう。総本部に勤務してて、一応私達の上司になるよ。結婚した時に奥さんの家に婿入りした関係で苗字が変わってるから、私と兄妹だって事に気づいてない人も結構いるんだけどね」

スバルとティアナの言葉に、総本部長である事等はサブ

ライズとして伏せておこうと少々茶目つ気を出しながらなのは同意の言葉を返した。更に続けて視線を横に滑らせ、候補生の中で唯一人の少年に向かい合う。

「——と、エリオは兄に稽古を付けて貰う約束だったよね。ならフェイトと一緒に一六五五に屋内練習場ね」

「はい！」

その言葉に、再びスバルがピクツ！と反応した。

「え？なのはさんのお兄さんも魔導士なんですか？それもエリオが稽古して貰うってことは格闘系ですよね！」

流石に恭也本人やシグナム程ではないが、ヴィータやなのはに近いレベル程度には戦闘バカと言っているスバルがその言葉を聞き逃す訳はなかった。

「あ——、兄は魔導士じゃないんだけどね。でも物凄く強いよ。格闘戦と言うか、刀剣戦闘のエキスパートでシグナム助教が太刀打ち出来ないとか、ヴィータ助教が絶対に敵に廻したくない相手の筆頭に選んだとか、フェイト隊長の剣術の師匠をやるとか言えば解るかな？」

なのはの言葉に、余り深く考えずに稽古を申し込んでしまった黒一点のエリオ・モンディアル候補生の表情が

真つ青になり、逆にそんな出鱈目な強さの人間がいるのかとスバルが目を輝かせた。

「そ、そんなつ！なんでそんな凄いお兄さんがいるって黙ってたんですかなのはさん！エリオだけじゃないですつ！私も一緒に稽古受けさせて下さいっ！」

「あ、あはは……そうだね、ちよつと待ってね、相談して見るから……」

あつちやー、と言う表情でなのはが額を抑えながら、くると回れ右して候補生達に背を向け携帯を取り出して電話を掛け始める。多分時間的に恭也もオフィスを出た頃の筈だから、留守電モードは解除している筈だ。

予想通り、四回程のコールで電話が繋がりに、頭を掻きながらなのはが事情を説明すると、苦笑交じりに別に構わなれと言おう恭也の返事が帰って来た為、空いている右手の親指と人差し指でオーケーの丸印を作ると、いやつたー！とスバルが飛び上がって喜ぶ声がグラウンドに響き渡った。

「お疲れ様です、先生」

待ち構えていたフェイトの声と共にドアが開けられ、六

課が寮として借り上げた建物の玄関に降り立った途端、目の前の情景に違和感と呆れを覚え、恭也は軽く眉間を揉んだ。

「なあ、フェイトよ……」

「すみませんです、はい」

恭也が言おうとした事を察知し、先回りしてフェイトが頭を下げる。

その背後には、エリオとスバルどころかティアナともう一人の候補生、キャロル・ルシエに、なのはとシグナム・ヴィータの二人の助教兼分隊長、及び何人かのデスクワーク組の姿まで見えていた為だ。

「ま、いい……あんまり時間はないから全員の相手は無理だぞ？」

やれやれ、と思いつつもそう言うと思は、後席に投げ出してあつた練習刀とトレーニングウェアを入れたスポーツバッグを担いで屋内練習場の方へ歩いて行った。その背後に、軽く肩を竦め合つたフェイトとヒューズを筆頭に、期待に目を輝かせたスバル以下の候補生達及び幹部達を引き連れて。

結果から言えば六課との交流会は最高の時間になった。

エリオ、スバルの順で軽く手合わせをした後、弟子が稽古を付けて貰う情景を見るだけというのに我慢出来なくなつたらしいフェイト及びシグナムと久々に本気に近い一本勝負をやり、その人間離れた剣戟の応酬に改めて候補生達をドン引きさせた後で練習場併設のシャワーで汗を落とし、夕食会に向かう。

その席で改めて自己紹介が行われ、相伴に預かつたヒューズが恭也の補佐官である事を告げられると、将来上級幹部過程を受けるつもりティアナが「あれ？補佐官を帯同出来るって事はかなりのお偉いさんなのでは？」と気付いて疑問をぶつけ、それでとうとう恭也の階級が執務長であり、その役職が警備総本部長であると言う事実が告げられて全員が仰天した。その若さや、上司とは言え堅苦しさを感じない態度から、精々課長か良くて部長クラスだろうと全員が思っていた為、実は思いきり雲の上の存在だった事とそうでありながらとんでもない実力の持ち主である事一度肝を抜かれたようだった。